



やる前から「どうせ無理」だと諦めてしまったことはあるだろうか。

3

「どうせ無理」をなくしたい



16 - 1

NASAより宇宙に近い町工場

ほっかいどうあかびら

北海道赤平市に、ロケットを開発している会社があります。こ

の会社は二〇〇四（平成十六）年、当時従業員数二十名ほどの

がら、大学と共同で民間ロケットの開発を始め、二〇〇九年には、

JAXAと共同でロケットの打ち上げ実験を実施しました。こん

な小さな会社が宇宙開発を始めるなんて、初めは誰もが「どう

せ無理」と思ったことでしよう。それをかなえたのが植松努さ

んです。

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

ロケットエンジンや人工衛星じんこうえいせいを開発し、打ち上げ実験にも成功。
世界でも数少ない、無重力の実験施設しせつまで建設しました。そこに
はNASAやJAXAなどからも研究者たちが実験をしに訪れ、
「NASAより宇宙うちゅうに近い町工場」と呼よばれるようになりました。
植松さんは言います。

「宇宙開発は、僕ぼくにとって夢ゆめをかなえるための手段しゅだんにすぎない。
僕の夢は、この世から『どうせ無理』をなくすことです。」

① NASA

アメリカ航空宇宙局こうくううちゅうきょく。

② JAXA

宇宙航空研究開発機構。政府全体の宇宙開発利用を支える機関。

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

「ロケット」という夢^{ゆめ}

植松^{うえまつ}さんは一九六六（昭和^{しょうわ}四十二）年、北海道^{あしべつ}芦別市に生まれました。幼い頃^{ころ}、大好きな祖父とアポロ^③十一号月面着陸の映像^{えいぞう}をテレビで見た時、祖父が言いました。

「ほら見れえ。ほら見れえ。人が月へ行つたぞ。おまえも月へ行けるぞ！」

大喜びしていた祖父の笑顔^{えがお}が忘れられず、植松さんは飛行機や宇宙^{うちゅう}ロケットの本をたくさん読むようになります。紙飛行機をどうすればよく飛ばせるのか研究し、体育館の端^{はし}から端まで飛ばせるようになりました。そうして、自分の好きなことに没頭^{ぼつとう}していききました。

中学生の時、進路相談で先生に「将来^{しょうらい}はどうするのか。」とき

17-1

16-3

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

かれ、「飛行機や宇宙^{うちゅう}ロケットの仕事がしたいです。」と植松^{うえまつ}さんは答えました。すると先生から返ってきた言葉は、

「夢^{ゆめ}みたいなきことを言っていないで、テスト勉強をなささい。宇宙

なんて、よほど頭がよ

くないと無理だ。おま

えにできるわけがな

い。」

というものでした。確^{たし}

かに植松さんは、飛行

機や宇宙ロケットの勉



▲ 無重力の実験施設^{し せつ}

③ アポロ十一号

アメリカ合衆国の宇宙船。一九六九年、歴史上初めて人類の月面着陸に成功した。

17-2

3 「どうせ無理」をなくしたい

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

強はたくさんしていましたが、学校の勉強はほとんどしていませんでした。しかし先生からそう言われると、とても悲しくなりました。

「夢^{ゆめ}ってなんだろう？　できそうな夢しか見てはいけないのだろうか？　やってみないとわからないのに、やったこともない人が無理だと決めるのは変じゃないか。今できないことを追いかけるのが夢なのではないか——」。

学生時代の経験

植松さんはその後、どうやったら夢を実現できるのか、一生懸^{けん}命^{めい}考えました。考えた末に、まずは図書館^{せんもんしよ}に行き、専門書をわかるレベルのものから読んでいくことにしました。自分が好きなこ

18-1

17-3

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

となので、^{むずか}難しくても全く苦にはなりません。知れば知るほど、^{うちゅう}宇宙のことがますます好きになりました。しかし周りの人たちからは「そんなこと、勉強したって意味がない。」「宇宙？ 何それ、^{じまん}自慢？」などと言われ、理解されませんでした。孤立した植^{うえ}松^{まつ}さんを救ったのは、ライト兄弟やエジソンなどの、本の中の人物でした。^{かれ}彼らも最初は誰^{だれ}にも信じてもらえませんでした。努力して後世に残る発明をしました。植松さんもがんばって勉強し続けました。

地元の高校を卒業して大学に進んだ植松さんは、高校時代と違^{ちが}い、大変よい成績をおさめます。大学の機械工学の授業で教わる内容には、小学校の頃^{ころ}から本屋で買った本や図書館で借りた専門^{せんもん}書^{しょ}を読んで、既^{すで}に知っていることがたくさんありました。中学校、

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

高校で「そんなものは成績に関係ないからやめろ。」と言われ続けた趣味しゅみの読書は、大学での専門せんもん的な勉強につながっていたのです。機械加工の実習では、最初の授業で、器用に加工する植松うえまつさんの姿すがたを見た先生から「おまえはもういいから他の学生ほかに教えてやってくれ。」と言われるほどでした。プラモデルをねだった時に父親から「鉄で作れ。」と言われ、父が経営する自動車電装品の修理工場でいろいろなものを作った経験が生かされたのです。

飛行機を設計する仕事から、実家の修理工場へ

大学で貴重きちょうな体験を積み重ねた植松さんは卒業後、念願かなって名古屋なごやで飛行機を設計する仕事に就つきました。ここで植松さんは多くの人たちに支えられ、たくさんのごことを学ぶことがで

19 - 1

18 - 3

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

きました。さまざまなプロジェクトに関わり、大好きだったことを仕事にできる幸せをかみしめました。しかし勤めて五年半がたった頃、植松さんは悩むようになります。職場に「飛行機のこと好きではないが、仕事だからやっている。」という人が増えてきたのです。「『好き』という気持ちがないければ仕事をよりよくすることはできない。だから、指示されないとも何もできなくなる。」と植松さんは思っていました。「『好き』



▲ 植松さんが開発に関わったハイブリッドロケット

19-2 3「どうせ無理」をなくしたい

49

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

という思いがないから、教えてもらったことと習ったことしかできなくなってしまうのだ。」と――。

悩^{なや}んだ末に植^{うえ}松^{まつ}さんは会社を辞^やめて北海道に^{もど}り、父親が一人で経営していた修理工場を^{いっしょ}一緒にやっ^{じょ}ていくことにします。しかし徐々に修理の仕事が減^{じょ}ってしまいました。悩み、考え、たどり着いたのが、パワーショベル用のリサイ^④クルマグネットの開発です。廃材^{はいさい}置き場のパワーショベルが動いているすぐそばで、人が手で金属をえり分けている現場を見て、思いついたのです。分^{ぶん}厚^{こう}い鉄板を切ったりつなげたりして組み立てる作業が多く、溶^{よう}接^{せつ}が大得意の植松さんはこのマグネットの開発で、苦勞の末に成功をおさめました。

20 - 1

19 - 3

- ・ B4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。